

ハワイ時代の小林参三郎*

—— 19世紀末から20世紀初頭のハワイホノルルを中心に ——

室 田 保 夫**

はじめに

小林参三郎という人物は一体何者なのか。社会福祉の歴史においても、ほとんど無名に近い人物である。一言で言うと、明治末期、京都の真言宗東寺の境内に済世病院が創設され、その院長という職責を全うした人物である。それは仏教社会事業家というより、むしろ慈善病院院長としての肩書から、医者といった方が適切かもしれない。生涯において『生命の神秘』（春秋社、1922）、『自然の名医』（春秋社、1924）といった著書を上梓し、医者として、また夫婦して岡田式静坐法の普及を計り、人々に健康や医学への大切さを訴えた人物である。しかしこの人物を調べていくと医療や仏教社会事業の分野で果たした業績と共に日本人移民の歴史においても少なからずの足跡を残した人物であることがわかる。

小林参三郎については、筆者は以前「近代における真言宗の社会事業について」（『高野山大学論叢』24号）や「宗教と医療—小林参三郎と済世病院での実践」（『密教文化』190号）といった論文で、論究したことがある。これらはもちろん彼の畢生の仕事と称せる京都東寺境内の済世病院とそこでの実践について論じたものである。小林は青年時代、ほぼ10年間、日本の年号では明治20年代後半から30年代にかけて、ハワイホノルルで日本人病院を開業していたことは知られているが、しかしこの事を題材にして今まで詳しく論じられたことは一切ない。最近の中西良樹の研究からも小林の業績が日本での事業に限られている¹⁾。すなわち小林のハワイ時代は未だヴェールに包まれたままなのである。しかし小林研究はもちろん、

1909（明治42）年からの済世病院の事業にはこのハワイ時代の体験を抜きにしては語れないと思われ、彼のハワイ時代の解明は小林参三郎研究にとっても重要なものと言わなければならない。

それと既述したように移民研究の一環として小林にスポットをあてることはきわめて重要であると思われる。小林と移民社会については、これまで日本人慈善病院を論じるときに、毛利伊賀や内田重吉らと共に、彼をとりまく初期のハワイの医師会や医療機関との関係でその名を取り上げられてはきている²⁾。ハワイの医師会が日本人移民の生活を守っていくことにおいて重要な役割を果たしたことは言うまでもない。しかし小林や毛利伊賀らを含めて個人的な研究がなされてきたかという点、今後の課題として残されていると言わざるを得ない。とりわけクーパー医科大学の同窓生でもあり、日本人慈善病院院長を務めた毛利伊賀や仏教青年会の会長を務めた灰田勝五郎らは中心人物であるし、今後の研究が待たれるところである³⁾。

たしかに小林の出自や青年時代についての史料が多くあるわけではない。しかしハワイ時代においては、当時のハワイで刊行された新聞雑誌史料等から彼の足跡がかなり見えてきた。筆者のハワイでの調査で主なる研究対象とした奥村多喜衛という牧師とも親交があったことも意外な事実であった⁴⁾。もちろん狭い社会のことでホノルルで交友があったことは想像に難くないことではあるが、ハワイで刊行されたキリスト教界の機関誌、例えば『ひかり』にも彼のことが記されていることにも少し驚かされた。日系人社会といった狭い人間関係から見れば、仏教とかキリスト教とかそう大したことでなく、お互い交友があったのも

*キーワード：小林参三郎、ハワイ、移民史、慈善、慈善病院

**関西学院大学社会学部教授

むしろ当然かもしれない。以下、まだ完全ではないが、筆者が渉獵した史料を中心に、彼のハワイ時代の実像の一端について考察していくことにする。

I 章 米国サンフランシスコからハワイへ

(1) その出自と医学、そしてクーパー医科大学

小林参三郎は1863(文久3)年10月、兵庫県加東郡下東條村(久下山村九番地)に生まれた⁵⁾。父は真島儀平で次男であった。真島家は薬舗であり、医家の小林家に嗣子として入ったのである。12歳にて小学校を終えた後は家にあつて農業と売薬業を助けつつ過ごした。少年時代、姫路で奉公生活を送ったという回顧もある。83(明治16)年夏、20歳の時、青雲の志を抱いて東都にのぼり、軍医総監松本順の門弟となった⁶⁾。小林は松本のもとで学僕として住み込み、ここで松本から多くの感化を受けることになる。5年にわたる苦学と研鑽をつんで、開業医の免許を取得した。しかし小林はこれで終わることなく、彼の眼は近代医学を学ぶため米国に向いていた。

1887(明治20)年、渡米し、サンフランシスコにあるクーパー医科大学で研鑽を積み、91年ドクターの学位を受けたのである⁷⁾。専攻は外科であった。そして翌92年ホノルルで開業したことになる。このような彼の事跡が見受けられるが、かかる事実も史料によって若干の差異があり、今後調査し正確な事跡を考察していかねばならない。さしあたりサンフランシスコのクーパー医科大学時代を見てみよう。

クーパー医科大学(Cooper Medical College)は1859年にサンフランシスコに創立された医科大学である。場所はSacramentとWebster通りの角に位置していた。しかしその後1909年の大地震のため、経営が困難となり、スタンフォード大学に移管され、現在、スタンフォード大医学部となっている⁸⁾。

このクーパー医科大学時代の小林についての史料はきわめて少なく、限られている。しかし当時サンフランシスコで刊行されていた「福音会」の史料に小林が登場してくるのは興味深い。この福音会とは、1877年10月、サンフランシスコにおい

て数名のクリスチャン学生によって「聖書の学習と会員相互の意識と生活の向上をはかって」⁹⁾設立されたキリスト教伝道の一団体である。「日本人留学生の集会所」¹⁰⁾のみならず寄宿舎や英語学校等多くの事業も行っており、在米日本人の定住化を背景に日本人コミュニティーの形成に貢献した。福音会の1889年の記録には小林につき次のような二つの報告が為されている。小林について當時を偲ばれる一等早いものである。

七月二十日 例会

小林参三郎氏医学上より吾人の平生注意すべきを細に説明し此程滞在中のハリス氏の義兄マツケンシユ氏は習学法の講義ありて閉会す会する者四十五人……以下略……¹¹⁾

九月十四日 例会

小林参三郎氏登壇し衛生談の演題にて氏か医学上の経験より青年書生の最も慎むべき肺病の事に付之をブラックボードに明示して極めて平坦に明晰に説明せられ大に來会者の注意を惹起したりき説の昼時司会は閉会を告げたり会する者三十五名¹²⁾

これらにより、少なくとも1889年7月にはこの会に入会していることは確かである。また同年9月28日の段には次週に福音会員懇親会が企図され、小林は池田栄之助、岡部健太郎とともにその委員に選出されている。その当日の懇親会の報告には「次に石津仁太郎、辰野勇記、小林参三郎、中田弁吉、青木富吉諸君の茶番、手品、講談等あり孰れも皆中々の最上始末にて拍手の中に演じられり」云々とある¹³⁾。このキリスト教の会に彼が如何なる経緯で参加することになったことについては今のところ不明である。また1890(明治23)年9月中の会員出入りについての記録に小林が退会とあり、この段階でこの会から離れている。後に小林が仏教に関わる事業を携っていることから、この時代にかかる福音会というキリスト教団体に短期間でも所属していたことは興味がわく。ただこの会の特徴から直ちにキリスト教云々より、一方で留学生の親睦的な性格を有していたこともあり、小林のキリスト教との関係のみでは捉えられないだろうし、さらに退会の理由も分からない。ともあれ小林は1891年、医科大を卒業することになる¹⁴⁾。

ところで別の史料によれば、彼は卒業後、サンフランシスコで開業したことになる。卒業後、サンフランシスコのジャーマン病院のドクター・モースを助け傍ら独立開業してその業を揮ったことが記されている¹⁵⁾。ただこのモースは外科において出藍の誉れ高い人物としてあり、彼から薫陶を受けたことは推察されるが、この件についても今後の課題である。医科大を卒業した後、帰国せずに、何故ハワイに渡ったか、という問題であるが、当時、教会関係者や友人で同時期クーバー医科大学を卒業した毛利伊賀もそうだが、サンフランシスコからハワイという交通や文化交流のルートがあり、小林がそのルートにのったことも別に不思議ではない。ただ日本に帰らないで、日本人移民の人々に尽力したい想いはサンフランシスコでの、「福音会」での経験、そして日本人移民社会の影響が少なからずあったことは想像に難くない。そしてハワイにおいて、次第に日本人移民の数は増えてきつつあったという背景も看過できない。

(2) ハワイホノルルへ

ともあれ小林は1892年に「第二の故郷」¹⁶⁾と称せるハワイに来ることになる。小林のハワイ時代を論究するにおいて、まず当時のハワイの状況を瞥見しておきたい¹⁷⁾。

日本人のハワイへ移民は1868（明治元）年、150人余のいわゆる「元年者」といわれる人々に始まる。85年に官約移民がはじまり、幾多の苦難を経て、多くの日本人が太平洋を渡り、異国の地で新しい生活を築いていった。94年からは私的移民に移行していくが、プランテーションにおける労働力として彼らは必要とされ、当初3年間の契約移民であった。従来、慣れ親しんで生活していた日本、すなわち文化が違う異国人として、低賃金の下での労苦という背景があり、3年間で帰国する者、あるいは故郷に帰れずハワイで零落した生活をおくる者等々、いずれにしろハワイ在住時代は異国ゆえの様々な生活問題との遭遇であった。現在と比較し、情報量が圧倒的に違う明治時代であれば尚更のことである。こうした状況の中で、日本人移民が沢山暮らすホノルルやハワイ島のヒロ等では、日本人が気軽に利用できる病院の

開設を何よりも切望されていたことは想像に難くない。ちなみに毛利が最初赴任したのはハワイ島のヒロである。

小林は1892（明治25）年1月、ハワイホノルルに渡り、ワイルクに居住し、同年11月8日、ライセンスを下付されている¹⁸⁾。しかしいかなる経緯でもって日本人のための病院に関わりをもったことについては明確な時期は確定できていない。ここにおいてもハワイ到着以降の記録が不明の状況である。ただ彼の外科の腕は「天風神来の概あり」と表現されているように、評判がよく「その名声は同胞間のみならず、広く白人及び支那人にまで喧伝された」とあり、医者としてその力は認められていたことは確かであろう¹⁹⁾。

ところで1893（明治26）年1月17日、ハワイ王朝が革命によって崩壊した。同時にハワイにおいて日本人の参政権回復運動がおこっている。これは日本・ハワイ渡航条約に保証されていたものだが、87年の憲法改正以来失われていた。それを93年1月のハワイ革命における仮政府の設置を機に回復しようとした運動であった。そして建白書が伊藤博文に提出されたが、提出したその67名の有志の中に小林は名を連ねる。

……前略……嗚呼布哇国二万有余ノ同胞ハ我大東日本国民ヲシテ諸邦ニ其政權ヲ掌握セシムヘキ楷梯ヲ与フル好模範ノ地ニ立脚セルモノナリ、今日ハ是レ我日本民族カ其価値ヲ世界ニ発揚スヘキ千載一遇ノ好機会ナリ、……略……我大東日本国民カ宇内ニ於ケルノ勢力ハ、長ク社会ノ下層ニ沈淪シテ遂ニ欧米人ト雄ヲ五大洲ニ相争フ能ハサルナリ然レトモ我日本四千万ノ同胞ニシテ朝トナク野トナク異邦ニアルト本国ニアルト問ハス奮然蹶起強硬ノ手段ヲ取り以テ大ニ運動ヲ試ミ一度布哇ノ政權ヲ掌握セハ唯ニ布哇ニ於ケル在留日本民族ノ地位ヲ高メルノミナラス実ニ日本国ノ国位ヲ宇内ニ高メルモノト云フヘキナリ²⁰⁾。

小林が他の同志とともにこの建白書に署名したことは、当時の日本が未だ列強の仲間に入り切れていないことに対する危機感や愛国心、憂国の情が窺える。ところである史料によれば小林は1893年春に一時帰国する²¹⁾。そして翌年には故国日本では日清戦争が勃発している。かかる祖国の重大

事件は当然ハワイ移民の日本人にとってきわめて大きな関心事であったことは想像に難くない。そして小林はこの戦争に対し、義捐金募集人のメンバーとなっている²²⁾。

かくてこの戦争は1895（明治28）年4月、終結することになるが、この勝利においてホノルルでも祝勝会が企図されることになり、小林もこれに参加していく。ホノルルにおける「日清戦役大勝祝賀会」は同年5月11日に開催されている。これより先の4月14日、小林は日本人商人組合、日本人宿屋組合、今西兼二（正金支店長）、内田重吉らと共にこの祝勝会の発起人となっている。また『布哇日本人史』には当日開催された模範陸海軍の観兵式における小林のことが以下のように記されている。

又模範軍隊とは云へ、正式に軍隊教練を成しただけであつて、真に迫り、規律整然、行動の敏捷なのには他国人を一驚せしめと云ふ、殊に騎兵隊の金光光治郎（岡山県人）が落馬して負傷した際の如き、看護兵が負傷した金光を担架に乗せ従軍々医小林参三郎を同伴、軍医総監内田重吉の居る野戦病院に運んだ敏捷さと、内田、小林両ドクトルが応急手当を済まして負傷兵を日本人病院に送らした迅速な行動には外国人を三嘆せしめ、……以下略……²³⁾

ともあれ小林は1892（明治25）年にハワイホノルルにわたり、日清戦争中はホノルルにおいて医者として働き、その後、おそらく95年には英国にわたり、1年間、ロンドン大学病院、聖トマス病院で実地につき、かつ学理を修めて再びハワイに戻ることになるのである。サンフランシスコからハワイにわたって大凡数年が経ているが、いわばその数年は助走期間と称せる期間で、以下の章から窺えるように、自己の拠点となる病院を建てて本格的な医療活動に入っていく。

II 章 日本人病院の小林参三郎

(1) 日本人病院の設立をめぐる

1896（明治29）年、英国から帰国した小林はホノルルに日本人病院を設立し、日本移民を中心にした仕事を開始することになる。同年11月上旬に

小林と共に毛利、三沢の3人の署名による以下のようなかなり文学的趣味をもった「理由書」が提出されている。

あかねさす我が日の本は今はしも秋風そよと
吹き初めて梧桐の枯葉落ちぬらめ仮の栖居の
この土地は故郷遠く懸けはなれ赤道近き孤島
にて四季の变りの更になく最耐え難き夏の日
の黄金も熔くる計りなり
折りしもあれや吾々は涼しき木蔭に筵打敷き
四方山の話に興がけるに急患者ありと呼声共
に連れ来れるは年長けたる男子の白き布を手
に巻けるものなりけり検め見れば切断の必要
あるにぞ遽に手術室を索めしも総ての調度不
足勝にて辛ふじて施術し畢り茲に初めて病室
設立の急務を感じぬ

今や邦人の此地に來り住むもの凡三萬余人病
に犯され瘡痍に悩むも伏して治療を受くべき
日本人病院なきは憐と云ふも愚なり开も我々
の従事する業は上もなき司命の職、殺生の権
を手中に握れるもの左れば王侯貴人も其信ず
る医には席を下つて敬せざる可からず斯る貴
き天職を持てる身の今も如く同胞の悩める態
を他所に見るは最心苦しき次第ならずや
之我々が多少の資を投じて茲に日本人病院を
設立せし所以なるぞかし時は
西曆千八百九十六年十一月上旬

創業者 三沢松次郎 毛利伊賀

小林参三郎²⁴⁾

これは文面から設立趣意書に相当するものと思
われる。ところで小林の病院は当地の日本語新聞
『やまと新聞』の広告欄に1896（明治29）年11月
初旬、登場してくる。その時の広告は以下の方
なものである²⁵⁾。

今般本邦人ノ為メベレタニア街ニ病室ヲ開キ
入室治療ノ依頼ニ応ス

日本人病室 医学士 小林参三郎

医学士 毛利伊賀

主事 三澤松次郎

入室料 一日 七十五仙以上

一週間分前納ノ事

また同紙の「日本人病室」という記事には「ベ
レタニア町武田商店の裏手なる新しき家に日本人
病室を設けられ主任医者は毛利、小林の両ドクト

ルにて三沢松次郎氏之を管理さるゝ趣又看護婦は近々の郵船にて参るべし又入室の患者は兩名ほどあり委しくは広告の通亦是在留日本人の一進歩²⁶⁾と記されている。いずれにしる1896年11月初め、小林を中心にして、毛利伊賀らと共に日本人病院が設立され、ここを拠点にして医療活動を開始することになるのである。

ところで1897年5月刊行の『やまと新聞』には「小生儀保養ノ為メ休養中ノ処来ル十七日（月曜日）ヨリ従前ノ通り診察治療ノ依頼ニ応ズ²⁷⁾」という小林（ベレタニア町）署名の広告が掲載されている。また8月になれば、小林の帰朝のことが報じられている。

近々の内小林ドクトル帰朝さるゝに付ては同氏の開き居らるゝ、日本人病室は毛利、内田、小島、三ドクトルにて受持ち従前の通り患者を取扱ふべし特に看護専門の三澤里以子（三沢松次郎の室）入りて看護に従事することとある故日本人病室の一進歩と申すべし三澤氏も再び同室の取締りとして同院内に引き移らるゝ事なるが氏本業のマッサージ治療術も全所にて行はるゝ、趣き且つ同氏は大なる薬風呂を病室の近所に設けらるゝとの事なり²⁸⁾

そして「小林ドクトルは来九月帰朝さるゝに付き同ドクトル診察の患者は皆毛利ドクトル引き受けて治療さるべく毛利ドクトルはベレタニア町小林診療所へ日々出張さるべしとの事²⁹⁾」とあり、毛利が代理として働くことが記されている。ここでは小林診療所となっていることに注目しておかねばならない。

この間、ハワイにおいては1898年8月18日、アメリカ合衆国がハワイを併合し、そのためハワイは合衆国の属国となるという政治的変革もあった。

（2）新日本人病院（リリハ街）

1896年に設立された日本人病院は、小林がその中心であったと思われる。小林の外科としての腕も確かであり、また移民人口も徐々に増え従来のものでは狭隘さを感じずには居られなくなり、新しい病院建設が模索されることになる。99年6月の『やまと新聞』には陳川生という次のような注目すべき論評「新築日本人病院」が掲載されている。

我同胞の布哇八嶋に散在するもの今や四万に達せんとしホノル、だけにて三千人余の日本人住居すと云ふ吾人は先きに同胞中の有力者の尽力により日本内地同様の小学校をホノル、に見るに至りしは喜ぶ者にして殊に子弟教育の如き公共の事業に対して在留同胞一般が発起者に同情を表せしを感ぜざるを得ず然れども吾人が公共事業として平素その發達希望する者学校事業に止まらず慈善事業、病院事業の如きは最も必要を感ずる所の者也慈善会は去る廿六日の大会に於て新に役員を改選して規則改正を断行したれば吾人は暫らく待つて其運動の結果を見んとす病院に至つてはベレタニア町に小林ドクトル監理の下に日本人病室なるものあれども未だ不完全なりされど病院をして社会一般の益を為さしめんとすれば公共的の事業となさざるべからず小林ドクトル爰に見る所あり一大病院を起すの希望を有せられしが公共の事業とするには同胞一般の熱心なる賛助なかるべからず加之種々の事情の之に伴ふものあり是に於て小林ドクトルは断然独力を以て多年の宿志を執行せられたり即ち近日落成せんとするリ、ハ町の病院は同ドクトルが五千弗余の私財を投じて建築せられたるものにして之に働くべき医員并に看護婦の如きも将に日本より来らんと愈々落成して院内整頓の上は同胞の便利を感ずる事少々にあらざるべければ吾人は公共事業に熱心なる同胞諸氏が新病院に向て充分賛助を与へられん事を希望するもの也³⁰⁾

このように、1899年になって小林は私財をつぎ込んで、新しい病院を建設しニーズに添えていくことになる。奥村多喜衛の編集するキリスト教の雑誌『ひかり』においてもこの挙につき「私利のみ忙しき今日此挙を見るは人の為め一の光を添えたりと云ふべし³¹⁾」とエールを送っている。そして彼の医者としての名声も更に上がっていった。

小林の医者としての活動はハワイの当地の新聞にしばしば掲載されていくことになるが、ここでその一例をみておくことにしよう。これは99年の『やまと新聞』の「小林ドクトルの大手術」という記事である。

日本人新築病院の高荘にして空氣の流通最も

宜しき所に於て第一其手始として例の小林ドクトルは二ツの大手術を試みられたり即ち一は日本人洋服裁縫店袋田喜一郎氏の妻君にして卵巣切除術を施されたり此病気は余程危険なるものなるに腹中既に切開の時機後れ新生物は膿と変じ……略…… 執刀は毛利ドクトルにして助手は小林ドクトルなり
 また一は森廣某の妻にして子宮外妊娠なり而して妻某は子宮外に妊娠すること最早や三ヶ月終にして破潰して腹内は血液を以て充たされ今数日を打捨て置かば貧血の爲めに一命を失ふに至るべきの所なりしが幸ひ小林ドクトルの大手術に逢ひて此両病婦とも其経過宜しきよし氏の名譽外人間に嘖々たるも亦宜ならずや³²⁾

リリハに建設された新しい病院に至るまでの経緯について、『新布哇』では「初めベレタニア町に於て小林彦三郎氏等主となりて支那人の家屋を借り病室の数凡十二個ありし当時入院患者としては日本人兩名に過ぎざりしが月を逐ふて十人二十人と殖え遂に一年間の入院患者は総計四百余名に上り他外患者は算外にて更に之に幾倍せり斯くて此に在ること二年余患者日に殖え到底狭隘の病室を以て収容するの余地なく且つ衛生上甚だ不適当なるを以て卅二年四月現今の地をトし此に建築を初め同年十一月に落成す³³⁾」と説明されている。このように、1896年11月に設立された病院(ベレタニア街)は規模的にも小さく、さらに大規模な病院建設が待望され、小林はこの期待に応じて行かねばならなくなり、99年夏からここで診療を始め、正式には新しい日本人病院が11月にリリハの地に完成することとなった。小林はここを拠点に診察、治療に従事していくことになる³⁴⁾。しかし完成直後、後述するようにホノルルにおいてペスト患者が発生するという大事件に遭遇することになる。

4月から11月刊行にかけて『ひかり』の広告に「此度帰朝候に就てはドクトル毛利伊賀氏に総ての事を依頼致置候也³⁵⁾」という小林のことが掲載されており、小林は1900年4月頃、帰朝しその後ドイツに渡り、ここで研鑽の機会をもっている。彼がハワイを離れたのも、後述するようなペストでの焼き払い事件の影響があるのだろう。

そして『ひかり』には「十二月五日より入院患者の需に應ず」という開院の知らせが掲載されているが、「但し熱病其他伝染病は当分謝絶す³⁶⁾」という但し書きもある。一方、『やまと新聞』には「小林ドクトルの帰着」として「今春帰朝されし日本人病院長ドクトル小林参三郎氏は本年六月伯林大学に遊び世界外科の泰斗たるフォン、ベルクマン氏に就き三ヶ月間外科学及び手術を学び且つ婦人科大家エルフファデン氏に就き婦人科を研究し大に得同氏は非常に肥満され一見別人の如くなりし氏が健全に帰布されしは賀すべきことにこそ³⁷⁾」と報じている。これらの史料より小林は6月ごろから11月中旬くらいまでハワイを離れていたのである。以下、小林が1902(明治35)年秋、中国に渡り、1年後帰布するまで『やまと新聞』広告欄から小林の消息、活動をみておくことにしよう。

1901年5月の『やまと新聞』には小林の経営する「今般当院の組織を改正し左の職員を選挙す」とする日本人病院の広告が掲載されている。それによれば、小林参三郎(外科主任兼院長)、毛利伊賀(内科主任)、シー・ビー・ウッド(外科詢議医)、ハーバート(内科詢議医)、アルバレッツ(細菌学詢議医)、東福寺子四郎(宿直医学士)、櫻川木工次郎(マッサーヂ技師)といった布陣である。翌02年10月7日発行の『やまと新聞』において「小生儀本月14日発の日本丸にて清国漫遊の途に上り候に就ては小生不在中医務は凡てドクトル毛利伊賀氏に依頼致置候に付き此段患者諸君に謹告す」という広告が掲載されている。

1903年の広告(1月～6月)によれば、アラケア街ベレタニア街角の「毛利小林病院」において、小林は旅行中のため休業となっている。この頃は故郷に帰り、地元東播慈善会の為に尽力していた時のことである。小林が再度ハワイに渡るのは後述するように、祖風宣揚会に接触し、日本での慈善病院を覚悟し来布した同年秋のことである。

Ⅲ章 日本人慈善会、ペスト焼き払い事件、そして慈善病院の設立

(1) 日本人慈善会をめぐって

ハワイにおける日本人慈善会の歴史は、1887

(明治20)年10月9日、日本領事館安藤太郎の妻文子が結成した「日本人共済会」に遡る。安藤太郎も88年に「日本人禁酒会」を結成し、89年5月にはメソジスト教会牧師砂本定吉と妻ウメ子によって「婦人慈善会」が結成された。しかし砂本が一時アメリカ大陸へ行ったことにより、活動は休止せざるを得なくなった。92年8月、再度ハワイに帰った砂本の努力によって、対象を婦人から日本人に広げて「日本人慈善会」として出発することになったのである。

ここで1893(明治26)年12月に改正された「在布哇国日本人慈善会規則」をみておこう。

在布哇国日本人慈善会規則

目的

第一條 本会ハ布哇国日本有志者一致共同シ互ニ相救恤スルモノトス

会名

第二條 本会ヲ名ケテ在布哇国日本人慈善会ト称ス

会員

第三條 在布哇国日本人ハ本会役員ノ紹介ヲ得テ会員タルヲ得ヘシ

第四條 本会ハ名誉会員ヲ設クル事ヲ得

第五條 会員ハ本会ノ資金トシテ毎月金拾仙ヲ納ムヘシ

但シ数ヶ月分前納スルモ妨ナシ

第六條 一ヶ月金五十仙以上ヲ納ムル者ヲ会員トナス

……略……

救恤

第十條 本会ニ於テ救恤スヘキモノハ会員中病氣災難等ノ不幸ニ罹リ自救ノ道ナキモノニ限ルヘシ

第十一條 前條病氣等ノ場合ニ於テハ一日金十仙ヨリ金參拾仙迄ノ割合ヲ以テ救恤シ災難等ノ場合ニ於テハ会長副会長会計書記庶務及委員(其事件ニ関係尤モ近キ者一名ヲ撰フ)協議ノ上其金額ヲ定ムヘシ³⁸⁾

そのような時、キリスト教牧師奥村多喜衛もホノルルのヌアヌ教会着任早々この慈善会や禁酒会に関わり、貧困、スラム問題や矯風問題、そして奥村ホームの経営等の慈善事業に奮闘する³⁹⁾。99

年5月25日、ヌアヌ教会で臨時総会が開催され、奥村多喜衛が慈善会副会長に就いている。そして同年10月、「布哇日本人慈善会」はハワイ政府より認められることになり、この時期の慈善会の重要な課題が、日本人慈善病院の創設であった。

既述したように1899年5月26日、日本人慈善会臨時大会において、その規則には改正されたが、それによれば、会の名称は「在布哇国日本人慈善会規則」となっており、第二条は「本会は在布哇国同胞中病氣并に災難等不慮の不幸に罹り自救の道なきものを救恤し其他一般の公益に関する慈善事業を為すを目的とす」、六条には「本会及一般慈善事業に特別の功勞ある者を推して名誉会員と為すことあるべし」と規定している⁴⁰⁾。

また1899年9月の大会における議決事項の一つに「役員会は慈善病院の設立の必要を認めて之を議決し取調委員として今西、毛利、勝沼、朝比奈、川崎、伊豆野の六氏を挙げ⁴¹⁾」と報じられている。そしてこの建設に拍車をかけたのが99年末から翌年にかけてのペスト焼き払い事件であった。次節において、19世紀の將に最後の年に勃発しハワイ移民社会に大きな衝撃を与えたこの事件について少しみておくことにしよう。

(2) ペスト予防焼き払い事件

1899(明治32)年12月12日、チャイナタウンで最初のペスト患者の犠牲者が出た。そして12月中に13件、翌1月には42件というように拡大していき、罹患者が増加するという事実に至る。日本人も十数名の患者が出、全体でも多数の死者が出て、まだ衛生状況が完備していないところにおいて、これは大問題化していった。こうした中で、1900年夏までチャイナタウンを中心にした焼き払いが行なわれていく。これがとりわけ1月20日の日本人街への延焼という事態をひきおこすことになる⁴²⁾。つまり、市は感染の蔓延を防ぐため一部患者家屋の焼き払いを命じたが、その日、強風や風の向きが変わるといふ予測し得ない自然状況のため、火が四方八方に飛び火し、マウナケア、リバー、スミス、ベレタニアの町を全焼していくことになる。この結果として3500人も日本人が焼け出された。この件を当時の『ひかり』の記事から見ておくことにしよう。

一月二十日朝消防隊は第十五廓の一部即ちカマカピリ教会堂の裏手焼払に取掛りしが折柄風悪しく焰は忽ち会堂の高塔に燃へ付き見る間に大会堂も全く焼け落たれば火は家より家に燃え移り午後には遮断地内殆んど全部烏有に帰し去れり……略……▲罹災地に住せしは重に日本人支那人にて土人も多少あり一同は一先カワイアハウ会堂及カリヒ立退所に移さる日本人総数凡そ千五百人何れも身を以て遁れしのみ惨状言ふ可らず▲日本人慈善会は此急を救はん為め奥村氏庭内外及外二ヶ所に於て大仕掛のたきだしをなし……以下略……⁴³⁾

当初より患者発生に対応して、ハワイ日本人医師会と日本人慈善会は協力して迅速な対応をしていくことになる。その本部はベレタニア街の小島春庵の診療所に置かれ（遮断地外）、衛生事務所を遮断地内、デーモン氏の書籍室に設置し、74名の検疫員、12名の委員を置いた。その内20名を「遮断区域内の病気及び困乏に陥りしものを調査せしめ、医会拠出の救助金を千弗を以て食料其他日用品を購ひしを日々困乏者に配当し且つ為めに諸般の便利を計る当時各医師⁴⁴⁾が各部署を担当した。その中で小林は「病体解剖救助及談判掛」となっている。そしてこの日本人街の消失事件は多大の災厄を招き、後の賠償問題にまで発展していった。かくて、この事件により、慈善病院の早期開設に拍車がかかることになったのである。

(3) 日本人慈善病院の設立

1899年6月の『やまと新聞』には「慈善会役員会」という記事の中で毛利伊賀の発議によって慈善病院設立の相談があつて、結局、今西、奥村、毛利、勝沼の4名に調査を託す、というように落着いたことが記されている⁴⁵⁾。こうしたとき、上述のペスト患者発生地区が延焼するという事件が勃発し、日本人慈善会は日本人婦人会らとともに被災者の救援に尽力していった。そしてこの事件が契機となって慈善病院建設が促進されることになる。1900年2月の『ひかり』には、「家なく食なく、終夜飢えて街頭に立ちし」者さへあり、「クインズホスピタル及日本人病院何れも黒死病流行中入院を謝絶したれば病人にして療養を為すの場所」がなくなつてしまい、それ故、救助

を含め慈善会の働きに期待せざるを得ないことが述べられている⁴⁶⁾。そのような状況下で同年4月には小林が帰朝し「日本人病院は閉鎖しカリヒ仮病院も遠からず撤去せざるべからざるにより現に入院中なる十余名の病者枕する所なきの惨状に立至たれば慈善会に於ては病院を建設し目下の急を救はんとのことを決議し已に〔カ〕パラマに適當なる地所（三千五百弗）を購求せしが建築其他の費用尚ほ三千弗を要するに付内外有志者より寄付金募集に着手せり⁴⁷⁾とある。

一方、同年6月からは慈善会新執行部によって日本人慈善病院設立に向けての運動が開始され、奥村は調査委員として、毛利伊賀らとともに設立案の検討に着手している。

日本人慈善病院報告

（自明治卅三年四月一日至同八月三十一日）
 輓近在留邦人の数は頓に増加して無慮五万を踰ゆるに至れり亦之に伴ふて不幸病災に罹り自営の途を失し医業の資に窮するもの甚だ多きを見る此に於て本会は夙に慈善病院設立の必要を感じ昨年来頻りに経営する処ありも未だ設立の運に到らざるを以て日本人病院に謀り本会救助の患者は特に入院料を軽減するの約を結び焦眉の急を凌ぐを得たり然るに該病院は一朝黒死病発生と共に閉鎖する所となり尋で仮病院を設けて一時の急に充てしもこれ亦日ならずして撤去せざるべからざるの不幸に遭遇せり為めに当時可憐なる幾多の病者は勢ひ露宿するの已むを得ざるに至れり本会は同胞の困厄看るに忍びず愈々慈善病院建設の事に決し汎く内外有志間に寄付金を醸し又本会の資金よりの補助を受け同院建設の功を告ぐるに至れり…以下略…⁴⁸⁾

7月に布哇国日本人慈善病院がカパラマに完成した。病院長には小林の親しい友人でもある毛利伊賀が就いた。病院の開院にあたり、「布哇国日本人慈善病院規則⁴⁹⁾をみておくことにしよう。

◎名称

第一條 本院を名けて布哇国日本人慈善病院と称す

◎目的

第貳條 本院は布哇国日本人慈善会規則第貳條同細則第貳條により全会付属とし

て設立したるものにて自給の途なき病者を救療するを以て主なる目的とす

◎事務の処理

第参條 本院の事務は病院会議に於て決議し布哇国日本人慈善会評議員会の承認を経て決行するものとす

◎院長

第四條 本院に院長一名を置き評議員会に於て推挙す

◎監理者

第五條 ……略……

◎医師

第六條 救助入院者の治療は特志の医師に囑託す

◎入院患者

第七條 本院は布哇国日本人慈善会の規則に該当し全会の救助を受くる者を収容するものとす

但し病室の許す限り自給患者を入院せしむることを得

右入院者には先づ医師の診断を受けしめ病症に依り入院を謝絶することあるべし

……以下略……

8条以下は略しているが、8条から10条までには「看護者」「病院会議」「修正改正」の項目がある。また当病院の「細則」「訪問者心得」「入院患者心得」等も決定されている。

(4) 病院の閉鎖と移民会社の寄付

このようにして1900（明治33）年7月15日、悲願の日本人慈善病院がカパラマに完成したのである。ところで当時、ホノルルには小林参三郎経営するところの日本人病院が存していたが、小林は被災者の入院を断り、病院を毛利に委せ同年秋、帰朝する。帰布後も慈善病院と小林の病院は、前者は内科、後者は外科というように振り分けられたが、個人経営の小林の病院は次第に行き詰まりを感じるようになる。そして日本人病院を閉鎖することになるのである。内田重吉も「小林君が自己の理想として新策した日本人病院が、帰布以来案外の不如意であつたのも自分にはよく之が徹底

的に理解することが出来たのである。果せる哉、三十四年から五年に掛けて、経営困難を言外に洩らした事がある病院の対立当時の同胞、ホノルル在留者の頭数からざつと算用しても、一方が衰運に傾くべきは瞭々火を見るよりも明白である⁵⁰⁾と回顧しているとおりである。

結果としてこれを移民会社が買収し、慈善会の方に寄付されることになり、慈善会はこれを受け入れて新しく規模を拡大し、再出発していくことになった。しかし、この移民会社からの寄付という点において、これまでの会社に対する鬱積した不満の感情があったりして、容易に事が運んだわけではない。

1902年6月に至り、『やまと新聞』紙上に日本人病院の慈善会への委譲の問題が具体的に登場してくる。6月30日夜、日本人小学校において慈善会の評議員会が開催され、ここで慈善病院のことが議論されることになった。最初、毛利会長より移民会社より慈善病院の件につき照会あったこと等の報告の後、次のような報告があった。

次で塩田氏は今度各移民会社と日本人病院所有主小林参三郎との間に於て同病院全体（外科医療器械を除き）売買の約成りし趣にて移民会社より慈善会へ対し移民会社は或る期間の後即ち同院の所有権が全く移民会社へ帰したる後に於ては全く之を慈善会へ寄附する者なれどもそれ迄の間は慈善病院に充てる目的を以て慈善会に於て無料を以て使用されんことを望むとの照会に接し役員会に於ては喜んで移民会社の好意を入る、ことに決し尚ほ現在の経済上従来の慈善病院と日本人病院跡との二ヶ所に於て病院を開くは不利益なるを以て地形及び建造物共現在の慈善病院に比し日本人病院の方優れるが故に慈善病院を日本人病院跡へ移転せしむることに決したるが尚ほ評議員会委員会の協賛を経て之を實行したし云々と⁵¹⁾

そして2、3の質問の後「日本人病院跡へ移転する利害等に付き種々研究の上移民会社の厚意を謝して之を伝染病室に充て何時にても激烈なる伝染病患者ありたる時ハ同所へ入院せしむること、現在の慈善病院を日本人病院跡へ移転すること等」を決したのである。

かかる状況の中で、慈善病院の財政的問題や移民会社が介在していること等が背景にあつてのことで、『布哇新報』との間に於て移転をめぐる論争があった。『布哇新報』では「朋党比洞公金を害し私利私欲同胞の汚辱を顧みざるものは明かに今日の日本人慈善会役員其人なり」「既に現在パラマに於て厳然たる地所と病院とを自己の所有とする慈善会が十数年の後にはリース権が消滅すべき日本人病院の寄付を受くるは不当無謀の甚だしきものなり」と非難した⁵²⁾。

やまと新聞社の方は「其反対党を中傷するが如き口吻を弄して、朋党比洞の正義を害し、私利私欲の公益を無にするものとして其行動を論難せり、吾人は新聞記者の意の存する所を推する能はずと雖も、苟も正義の筆を以て立べき新聞記者が、徒らに軽率なる筆鋒を以て是等の公共事業を議するの心事を憫まざるを得ず」と非難し、「茲に見る所ありて日本人病院の所有者が、同院を売却するの意あるを聞き、之を買収して専ら慈善会の用に供し、益々同会の基礎を鞏固ならしめんとの好意を以て同会に謀る所ありき、此を以て同役員会に於ては喜んで其好意を容れ、両院合併の画策を樹て、尚ほ之れを評議員会の議に附して其協賛を求むるに至れり」と賛意を表している⁵³⁾。そして翌日には「既に日本人病院の使用を議決せし以上は、両院を比較し便利にして有益なる方を多く使用し、他を伝染病室に充つる等は全く同会の自由意志に属す、此等の行動は実に寄付者の満足を買ふに足るものと謂ふべき也、如何となれば多数の寄付者は、今日の如く慈善会が盛運に向ひつゝ、あるを喜びこそすれ、記者若くハ或る一派の人士の如き狭量なる偏見を有するものにあらざればなり」⁵⁴⁾と現実路線を長とし、『布哇新報』の論を批判した。

かくて1902年8月の『やまと新聞』には「日本人慈善病院は既記の如く一昨日リリハ街日本人病院の跡へ引移り諸事整頓したるを以て本日午後二時より五時まで来観を許さるゝ由慈善会々長毛利ドクトルより同院関係者へそれぞれ案内状を發せられたり」⁵⁵⁾とある。こうして移民会社との軋轢や批判がありながらも、小林の日本人病院は慈善病院の傘下に入つていったのである。そして従来からのカパラマの方は隔離病院として、また移民

会社から慈善会に寄贈されたりリリハの方は日本人慈善病院と呼ばれるようになっていった。

その後、この慈善病院は1918（大正7）年にクアキニ地区に新しい病院を建て、新日本人慈善病院として出発し、その後戦時中の42年にクアキニ病院と改称され、現在に至っている。小林の設立した病院のルーツは1896年の病院であり、それが99年のリリハの所謂日本人病院、これが日本人慈善病院になり、そしてクアキニ病院（Kuakini Medical Center）へと続いているのである。

IV章 仏教青年会と小林をめぐる

(1) 仏教への帰依と仏教青年会

そもそもハワイにおいて仏教の伝道が開始されたのは、キリスト教伝道に遅れて、1889（明治22）年の曜日蒼龍によってである。先ずホノルルにおいて開始され全島に於て組織的に行われていった。97年に本派本願寺は宮本恵順を派遣し、翌年、里見法爾が布教のためハワイにわたる。そして99年に里見が今村恵猛を同伴し、ハワイに来て、ホノルルフオート街に布教所を新築し、里見監督が帰国しその後今村がその職につくことになる。この今村の尽力があり、ハワイの本願寺派の布教が大きく飛躍していくことになるのである⁵⁶⁾。

小林のハワイ時代を考察するとき、この今村との関係を抜きにしては語ることが出来ない。今村恵猛（1867～1932）は慶応大学を卒業した後、1899年1月本願寺派の開教使として渡り、32年まで布教監督として日系移民のために仏教をおして精神的慰藉の貢献したのみならず、教育事業や福祉等多彩な社会活動を展開した人物である⁵⁷⁾。守屋友江はそれを「日本仏教がアメリカに根付いてくアメリカ仏教」となる過程⁵⁸⁾と形容している。一方、島田法子はハワイの仏教の歴史を語る時、「ハワイ仏教」という用語を使用している⁵⁹⁾。

かかる状況の中で1900年7月、今村の指導の下、「青年の教化を計り、精神上の修養と共に移民地に活動すべき準備を完成せんことを期し」⁶⁰⁾仏教青年会（Young Men's Buddhist Association）が発足することになる。英文名からも窺えるように、キリスト教のYMCAを意識していることが推察されるし、また多彩な活動も類似している。

この指導者が今村恵猛であった。そして当初この会の会長になったのは同じ医者仲間であった灰田勝五郎である。

1901（明治34）年3月10日、本願寺出張所内で開催される仏教青年会月次会の予定は以下のようになっている⁶¹。「高等動物と下等人類」（西垣寿太郎）、「希望」（藪地蔦次郎）、「死の福音」（松本豊隆）、「欧米人に対する日本青年の覚悟」（小林参三郎）、「止悪作善」（今村恵猛）等であり、これからも伺えるようにこの時期から、小林はこの会に出席している。彼が更にこの会に接近していくのは、彼が大病を患い、生死をさまようような重態に陥った以前から今村とは面識があったことが窺える。ただその時期については判然としないが、このことについて少し論じておくことが必要である。彼の著には次のような当時のエピソードが語られている⁶²。これは小林が書いたものでないが、自身の著作の「序」に書かれているということは当然小林も校閲していると思われるから信憑性があるだろう。少し長いが引用しておこう。

布哇滞在中、風土病に犯されて、四十度内外の熱が一ヶ月以上も継続し、氏の一命も殆んど危く見えた事があつた。その時本願寺の布教場主任今村恵猛氏の訪問を受けた。それ迄純然たる科学者であつた氏は『愈々自分の死期が切迫したから、引導を渡しに来たのであらう。よしそれならば自分も最新科学の立場から宗教が迷信に過ぎない事を言つて、論駁してやらう』と、心に或る警戒をして対応された。

が、今村氏は無論、引導を渡すために訪問したのではなかつた。対談は約一時間に及んだ。その内容が何であつたかは、元より吾等の知る所でなく、又茲に説く必要もない事である。今村氏が辞去されると、小林氏は重病の身でありながら自ら立つて治療室に入り、冷水を以て全身沐浴を試みられた。その翌日からさしもの高熱が急に減退して、幾何もなく全癒された。

小林氏が盛んに佛書を渉猟され初めたのはその時からだと言へば、一席の法談が氏の心眼を開かしめた個中の消息は推するに難くない。その後香港でも腸窒扶斯と肺炎とを併発

して瀕死の状態に陥られた事があつたが、氏は堅く、此のまゝ、死にはしない事を信じて居られたので、元気が居常と異らなかつたと言ふ事である。

ここでの大病の時期について、明確な確証はないが、『静坐物語』では1901年4月2日発病し一ヶ月間の大病、とされている⁶³。次節の青年会入会のことを考えればこの日時⁶⁴の信憑性はあるだろう。

最後に1901年7月25日、アメリカ丸日本婦人侮辱事件についてふれておこう⁶⁴。これはアメリカ丸がホノルルに入港したとき、検疫官が日本女性客員に「卑猥な無礼を加えた」という事件で、これにつき当然日本人移民は激高し、8月2日にホノルル日本人小学校において在留民大会を開催し、小林はその先頭に立ち「約二、〇〇〇人の聴衆を前に他の有志十七名とともに壇上に立ち、即時ハワイ日本人会を組織し、その名を以てアメリカ政府に抗議することを主張した」⁶⁵のである。そして小林ら発起人のもとで「布哇日本人会」を立ち上げたのである。その同年8月付けの宣言書に曰く。

吾人同胞が始めて此地に在留してより既に久しき年所を閲し今や我が在留同胞の数六万の多きに及ぶ而かも其勢力大に振はず常に外人の軽侮を蒙り竊に憤既に堪へざるもの其例に乏しからず顧ふにこれ彼等が常に人種の偏見を以て吾人を遇するに因るべしと雖も抑も亦吾人在留者が内其一致を保ち外大国民たるの品性を維ぐに於て遺憾なきを免れざるなり茲に布哇日本人会は全島在留者の歩調を一にして深く自ら戒飾を加へて国民的品位を高め其権利を擁護して秋毫の侵害を容きず苟も吾人の権利に関する問題は緩急に応じて之を処理し以て在留同胞の福利を進め日本国民たる威信を完ふし我が帝国の国光を輝かさんことを期す⁶⁶

この会はホノルルに本部を置き活動したが、創立後、幾ばくもしないうちに消滅したが、後日復活する。

（2）仏教青年会での活動

1901（明治34）年、仏教青年会の機関誌『同胞』10月号の仏教青年会の本月入会者のところに

小林の名が挙がっており、9月前後に入会したものと考えられる。4月から5月にかけてに大病を患い、その奇跡的な回復において仏教への開眼を果たし、幾ばくもしないうちに仏教青年会に入会することになったのだろう。そして翌月号には灰田勝五郎会長が帰朝するため「ドクトル小林参三郎氏を挙げて春期総会迄会長の任を依嘱することに決す」とあり、入会幾ばくもない時期に彼が会長に推されていることから、彼にひときわ信望が厚かったことが推察される。

また1901年の『同胞』には9月8日に仏教青年会第二年度の月次会が開催され、小林は「宗教と膽力」という題で「真正の膽力は、宗教によりて初めて修養せらる、古来幾多の偉人が、如何に宗教的修養を勉めたるにと説き来りて弘く例を内外の名士に取り、輕妙に、快活に、且つ熱心に、論じ去ること壹時間語調佳境に入り毎に拍手四隅に起り、大に聴衆を鼓舞せり」⁶⁷⁾云々と報じられている。

1904年2月刊行の『同胞』誌の広告に「生儀医学視察のため清国漫遊中の処今回帰府仕り従前の通り患者治療の需めに応ず 追て清国漫遊中の疾病未だ全癒せざるに付当分の内治療中の患者を除くの外夜間診療を謝絶す」とある。ちなみに、その住所はアラケア街とベレタニア街の角で「毛利小林診察所」となっている。そして同号によれば1月10日に青年会春期総会並役員改選が行われて、投票の結果、小林が会長に選ばれている。副会長は尾山瑞雄、幹事和田喜伝、会計は内田慶次郎である。

ちなみに同年3月刊行同誌には「会長小林ドクトルの結婚」として「本会々長小林ドクトルは去月志村信子嬢と華燭の典を挙げられ全十七日を以て望月に於て盛大なる披露宴を催されたり外人間に交際多き氏の事とて来賓には白人あり支那人ありカナカあり席上種々の余興等ありて近來稀なる盛宴なりき」⁶⁸⁾と報じられている。既述したようにホノルルにある仏教青年会は1900(明治33)年7月に発足している。ここで発足時から15期までの会長職のみみてみると、以下ようになる(小林は16期以降、1908年帰国するまでオアフ島を離れマウイ島に移住)。

1期(1900年7月) 灰田勝五郎

- 2期(1901年1月) 灰田勝五郎
- 3期(1901年7月) 灰田勝五郎
(途中から小林が会長)
- 4期(1902年1月) 小林参三郎
- 5期(1902年7月) 小林万吉
- 6期(1903年1月) 灰田勝五郎
- 7期(1903年7月) 岩永知一
- 8期(1904年1月) 小林参三郎
- 9期(1904年7月) 小林参三郎
- 10期(1905年1月) 尾山瑞雄
- 11期(1905年7月) 小林参三郎
- 12期(1906年1月) 小林参三郎
- 13期(1906年7月) 小林参三郎
- 14期(1907年1月) 小林参三郎(マウイ島移住のため灰田会長)
- 15期(1907年7月) 灰田勝五郎

このように会長職に就いたのは小林が39歳から43歳の時であり、そして会長職以外には就いていない。こうしてみると、初期において小林が会長に就いた期間の多さが目に付き、青年会の中心人物であったと理解できる。

1902(明治35)年7月13日、仏教青年会の2周年記念会が開催された。以下がその順序である。

- 一、唱歌(法の御山) 合唱
- 一、婦依文拝読 参列者一同
- 一、開会の辞 会長ドクトル小林参三郎
- 一、演説(英語) 会員 三樹七之助
- 一、演説 同 小林万吉
- 一、唱歌(三寶の恩) 合唱
- 一、亜細亜の光 ミセスバーバー
- 一、世界に対する日本青年の天職 井上慈曠
- 一、唱歌 合唱

そしてこの時、小林は「先づ青年会が日に月に順境に向て進行するの喜を述べ健全にして元気ある我会を永遠の未来に發達せしむるは、肉体上外国の誘惑に打勝ち精神上仏陀の慈悲に頼るの最も万全の策なる事を述べて懇々會員に望む処あり」⁶⁹⁾と論じたことが掲載されており、同号には小林が中国へ行くこと、したがって病院は慈善病院に引き受けられることになったと報じている。

また同年の『同胞』10月号に、青年会会長の小林が中国に行くこと、その送別会をが9月21日盛大にもたれたこと、そして14日に日本丸にて出帆

した事等が報じられている。そして翌月号には無事、日本に到着したことが報じられ、日本経由で行っている⁷⁰⁾。この中国行きにおいては、1年後の『同胞』⁷¹⁾に「前会長小林ドクトルの帰布」として「昨年来大なる壯図を懷て支那大陸漫遊中なりし氏は支那よりの帰途久振りの故郷に立寄り亡母君の法事を営み同所に於て一千有名の患者を慈善にて治療し終つて去月末帰布せられたり大悲の慈光願くは此れ壯漢の上にもましませといのる」とある。したがって1902(明治35)年10月から約一年間ホノルルを留守にしたが、この間の日本での活動が生涯を決する出会いに繋がったのである。

V章 祖風宣揚会、そしてハワイへ

(1) 祖風宣揚会をめぐって

日清戦争後、日本は社会問題の顕現期と称されるように、貧困問題、労働問題等資本主義の展開と共に、近代的な社会問題が登場してきた時代的特徴をもつ。時は新しく20世紀という時代を迎え、仏教界も新仏教運動や浄土宗慈善会、あるいは浄土真宗においては大谷光尊の発意による「大日本仏教慈善会財団」の発会等、社会との対応を模索しだした。かかる時代背景の中で、真言宗も1903(明治36)年6月15日、「祖風宣揚会」が発会する。その趣意書には「即事而真」の教風が衰退したことを慨嘆し「茲に祖風宣揚会なるものを設立し、以て祖風を千載の後に宣揚せんとす。是れ実に吾人宗徒が国家社会に対する義務心の発動と、宗祖に対し奉る報恩心の衝動に出づるのみ」云々と披瀝されており、具体的には新聞、教育、慈善事業等の計画、とりわけ慈善病院の設立や海外伝道等が企図されたのである。この会が宗祖弘法大師の誕生日に合わせて、1903年6月に発足したということは、丁度小林が帰国中と偶然にも合致している⁷²⁾。

ところで中国で罹病し、1903(明治36)年5月、帰郷した小林は地元の加東郡慈善会の求めに応じて、開業した。ここで小林は真言宗高祖弘法大師の靈感にふれたのである。それは同年夏、一人の女性を手術したことに依拠する。この女性は不治の病と診断されていたが、弘法大師の御手にすがり、大師堂で願をかけ、小林に手術を依頼す

ることとなり、結果快癒したという霊験談に依拠している。また他の手術のさいにも、患者と小林は祈祷を受け、その護符をもって手術に臨み、稀有の大手術は成功した。当時の心境を「予も患者も当時心頭死生の念なかりき、唯靈感洋々たるものありしのみ、想ふ予にして若し曩日に於ける高祖の靈感に接触せし一事象なかりせばこの大手術を全うすべき元気の充溢を獲べからざりしならん⁷³⁾」と語ったという。

そして1903年の秋、再びホノルルに帰ろうとする小林に宣揚会の事業についての祈願がおくれたのである。つまり、小林の郷里での活躍を知り、真言宗聯合大僧正長宥匡は1903年10月19日付けで小林に感謝状を贈った。「多年医業に従つて内外国民を拯救し特に本年夏期休暇中故国に帰り数百の人民に施療し数年の重患治療する者多く為に感涙に咽ふ者郷閭に溢れたり、且つ本宗祖祖風宣揚会が将来開設せんとする慈善病院をも尽力補助すべき旨声明されしと聞く真に宗祖の大慈悲心を以て任じたる博士と称すべし依つて此に微辞を致して感謝の意を表す⁷⁴⁾」と。このようにして仏教へ開かれた小林は真言宗に、弘法大師の魂にも接近していくのである。

また9月8日の南朝円らの土宜法龍宛て書簡において、小林の意見として5項目が認められているが、その中に「目下所有の器機参千円程の物品は病院へ寄附する事」「創立費寄附募集に付ては、此度布哇へ渡航後、外人に寄附を勧誘し充分助力を為す事」「猶創立費不足にて開院難の場合は、自分も貳参千円の助成を為す事⁷⁵⁾」とあり、この時のハワイ行きは、寄付金や設立資金を得る意図があったことがわかる。

小林は11月7日付けで慈善病院の設立経営に関わる承諾書を会長の上田照遍宛てに送付した。ここに小林と真言宗の一大事業の礎石が築かれたのである。この件につき『六大新報』には「祖風宣揚会と小林参三郎⁷⁶⁾」と題して次のように報じられている。

同氏は郵船の都合により七日の出船を延して九日横浜出帆の汽船にて布哇に渡航せられしが同氏は東京に於ける各知友に祖風宣揚会慈善病院設立経営懇嘱の件を語りしに何れも熱心に賛成を表せられし由にて、同氏よりは

弥々出帆に臨み本部に対し左の請書を送越されたり

貴会第三期事業たる慈善病院の設立経営に付御懇嘱の件承諾仕候也

明治三十六年十一月七日

小林参三郎

真言宗祖風宣揚会 会長 上田照遍殿

このようにして小林は事業の開始を2年後として、再度、ハワイに向かったのである。これはこれまでと相違し、2年間という期限付きのハワイ行きであったが、日露戦争の勃発もあり、予定通りには事は運ばなかった。

(2) ハワイにて

このようにして小林はハワイホノルルの地を再度踏むことになる。ハワイ在住中何回も日本に帰っているが、今回、「第二の故郷」たるハワイへ帰ることは、日本で真言宗の祖風宣揚会の慈善病院を創設するという、具体的にはその資金集めという大きな目的があった。当然この時点で小林はハワイから引き上げ、日本に骨を埋める覚悟が当然あったと思われる。そして1903（明治36）年11月より1908（明治41）年8月帰国するまで約5年間ハワイにて過ごすことになる。ちなみに場所はオアフのホノルルだが、次節でみるように07年3月末から08年8月までの1年半近くはマウイ島ワイルクで医業に携わることになる。

『やまと新聞』によれば、久しぶりに帰布した小林につき「小林ドクターの開業」として「過日帰布したるドクター小林はアラケアとベレタニア街角なる毛利小林共同診療所にて来る廿六日より開業する由」と報じられ、広告欄には「生儀医学観察の爲め清国漫遊中の処今回帰布」し「従前の通り」上述の日（11月26日）と診療所において開業することが掲げられている⁷⁷⁾。

『同胞』（1904年1月号）によれば、アドヴァタイザー新聞や『布哇新報』等で彼が帰ってきたこと、彼の事跡等が紹介されていることを伝えている。一方、日本の『六大新報』25号（1904年1月24日）は次のように報じている。

同氏は前年布哇仏教青年会々長として会務に熱心せられし因縁を以て、昨年再び渡布せらるゝや、同青年会に於ては直に氏の歓迎会を

開き、昨年十一月二十二日夜同会第二講堂に於て開会歓迎唱歌を以て式を終り司会者和田幹事の挨拶今村監督木村斉次岩永知一内田慶次郎等諸氏の歓迎の辞あり夫より小林ドクトルの答辞幼年教会員の唱歌にて式を終り茶菓の饗応をなし席上更に一同の希望により小林氏は支那大陸漫遊談を爲して大喝采を博し夫より例の如く会員の余興數番ありて非常の盛会なりし由

このハワイでの小林の大きな目的は既述のように、京都における慈善病院創設のための資金集めにあった。帰布する前に、病院の運営を覚悟した小林にとって、もはや自分のためだけでなく、真言宗の一大事業への参画という重要な役割を既に担っていたのである。一方、ホノルルの自己の病院は日本人慈善病院として既に姿をかえていた。

1904（明治37）年8月11日に開催された仏教青年会月次演説会において、会長職の小林は「宗教と成功」という題で演説を爲したこと、その内容は「東西歴史中より引証し或は比較し或は評論し其間自己の所感を述べ一時間に渡る大演説を試みられたり」⁷⁸⁾と報じられているように、仏教青年会においても指導的立場にあった。ここで日本の真言宗の機関紙『六大新報』に掲載された小林の当時の書簡を見ておくことにしよう。

……前略……日露開戦相成り候に付いては宣揚会事業も意の如く進捗せずとの御歎、御尤もの次第と存じ候。何事にも一業を成功するまでには、幾多の艱苦と幾多の障害ある事は、初めより覚悟を要する所と存じ候。況して祖風宣揚会の如き大事業を成功せんには、御互に大覚悟と大決心を要する事と存じ候。南洋の楽天地にも同様の風、吹き来り内外人一同大閉口の体に候。

小生事も先年支那医学界開拓の爲めに、多大の費用を抛ち、殆ど一家の財産を傾倒せる有様なるも、精神は毫も屈せず、諸君が余の如き無能不才の者に、斯く重任を託せられ候事は、終生の一大面目と深く肝銘し、宣揚会病院設立の計画は寤寐にも忘れ不申、設令、幾多の艱難、幾多の年月を経候とも必ず初志を変せず、屹度本望相違すべく候……中略……病院設立に就ては、当初約二万金は要すべ

し。維持の費用も要すべく、種々の困難も来るべく善事業なる丈、より多くの障害あるべし（殊に日本の如き宗教的觀念の乏しき国には）されど千古の偉業は、金力や位貴の人にて成るものにあらず。要は誠心誠意にあり。真言宗の慈善病院は宗祖の御本位なり、各位の銳意奮発は濟世の本位なり。必ず成功を奏すべきは、余の信じて疑はざる所なり。……後略……⁷⁹⁾

このように小林は「真言宗の慈善病院は宗祖の御本位なり、各位の銳意奮発は濟世の本位なり。必ず成功を奏すべきは、余の信じて疑はざる所なり」と認め、真言宗の慈善事業に全身全霊を捧げて、新しい事業に対する期待と希望を故国日本に向けて表明している。

ちなみに、この時期、すなわち1904年2月、故国日本においてロシアとの戦争が勃発しているが、当地の『やまと新聞』等の日本語新聞の報道にも窺えるように、これは先の日清戦争同様、小林はもちろんハワイの日本人や日系人にとっても大きな関心事であったことは明白である。戦争が勃発した時、「軍事費取扱発起人」の常設委員の委員として小林の名が挙がっている⁸⁰⁾。

さらに日露戦争中の1905（明治38）年4月付けで、軍人遺族救護義会本部（東京市京橋区築地）の在布地方委員として、小林は灰田勝五郎や勝沼富造らと共に、8人の署名において「敢て在布同胞諸君に告ぐ」という激励文を掲載している。

征露の師出て、より海に陸に連戦連勝の偉効を奏し以て国威を宣揚したるもの 大元帥陛下の御威徳に依る処なりと雖も、抑も亦た我忠勇なる陸海軍人諸士が奮戦殉国の力に依るにあらずんば非らず、噫々我國民たる者誰か感激其の偉勲を佩謝せざるものあらんや、而して顧れば是等出征者の家族忠死者の遺族にして其状実に悲痛に堪へざるもの尠からず、之れを救護扶助して忠誠国に尽すに後顧の憂なからしむと同時に、骨を山嶽に曝らし血を波濤に漂したる殉国忠死者の遺族を困難に救ひ慰安を与ふるは刻下の急務にして國民の義として看過し得べきものならずと信ず、本会は日清戦争の現状に見当時率先創立せるものにして、爾来本会の救護にかゝるもの実に数

万の多きに及べりと雖も未だ以て之が全きを保せず、今回特に本会協賛員望月圭介氏を派し在布同胞諸君の血と涙に訴へ会務の拡張を図り、平時及戦時に際し是等悲悼の家遺族をして国家恩典の及ざる処を補救し、永く此義挙を貫き諸君と共に我國民特性の本義を尽さんと欲す愛国熱誠の諸君此際奮つて御加盟あらんことを切望す⁸¹⁾

このように小林は、ハワイにいながらも、日露戦争に関わりを持つことになるのである。

1905年3月29日、慈善病院の総会と評議委員会が開催された。総会が終了したあと、評議委員会が開催され、毛利院長が病気のための辞任を受け、その後任者として選挙が行われた。そして大多数を以て小林が院長に当選した⁸²⁾。

しかし『やまと新聞』には「過日の慈善会評議委員会にて病院長に当選したる小林氏は辞任を申出で堅く取りて動かれざりしも諸方よりの勧誘もたし難く昨日承諾辞任せられたりと聞く」⁸³⁾とある。小林は帰国後の事業のことを考慮しての固辞であったと思われる。

一方、1905年、仏教青年会の臨時総会での役員改選の結果、小林は会長に選ばれている。副会長は置かないことも決定。7月から会長としてホノルルで医療方面だけでなく仏教青年会での重責を果たすことになる。

1906年8月12日、真宗別院の披露会が持たれ、小林は青年会惣代としてとして祝辞を述べている。その年10月1日刊行の『同胞』誌は「開教十周年別院昇格本会七周年」の記念号となっている⁸⁴⁾。その巻頭には「大日本帝国が日露戦争を経て世界第一等国の班に列し、国光發輝皇威宣揚、民力開展の第一年に於て、我等在布の真宗教徒が、開教十周年並に別院開設の祝典を挙ぐるを得たるハ、光榮何者か之れに若かむ」と論じ、10年間の成果として24の布教所、3の派出説教所と16の小学校を建立し、また真宗教会、青年会、幼年会、婦人会等の教化団体、あるいは日曜学校、青年英語学校等の教育機関、『同胞』、『教化雑誌』の刊行、信徒4万余人、生徒2千余人、読者も数千人に達したこと等が記されている。翌1907年1月から小林は仏教青年会の会長職に就く。ちなみに副会長和田喜、幹事小野寺徳治、会計小林徳三

郎である。

(3) マウイ島ワイルクへ

1907(明治40)年3月27日、今村恵猛夫妻の婦布と小林の馬哇島ワイルクへの転任との歓送迎会が第二講堂にて開催された。かくて小林は07年春から翌08年8月、帰国するまで一年数ヶ月このマウイ島のワイルクで医療事業に従事している。このワイルク行きによって、ホノルルを離れることとなり、小林は青年会の会長職は止めさせられることになる⁸⁵⁾。このマウイ島への赴任がいかなる理由からなのか、且つここでの小林については殆ど消息が分からないが、『同胞』誌から彼に関する2、3の記事をみておくことにしよう。赴任した年の秋、布哇中学校の開校に際し、マウイから小林は次のような書簡を寄せている⁸⁶⁾。

祝文

荆山の壁は美なりと雖も琢かざれば其光なく、顔冉の才は茂しと雖も学ばざれば其用を為さず、されば人の世に於けるや其子弟の教育より急なるはなし。真宗の此地に法幢を揚ぐるや布教の傍ら専ら子弟の教育を計り年に月に益盛大に赴き校舎の数二十有余、教ゆる所の子弟三千に垂んとす。今や進んで中学校を興し茲に明治四十年十月十三日其始業の盛典を挙げんとす嗚呼盛なりと謂ふべし。惟ふに斯の如く此地子弟教育界に燦爛偉大の貢献を為し得たる所以のものは蓋し其由来する所なくんばあるべからず、今より十数年前里見、今村の両師の持来られし仏陀の活火は両師の獅子吼に因り孤島千万人の心に点し信徒の一貫せる信仰のもとに熱誠なる賛助となり実に今村師の崇高森厳なる英資を以て堅忍力行指導監督其宜しきを得し結果に外ならざるなり、希くば年を逐て駉々有意の青年を育成し光榮ある我民族の発展を期せられん事を謹んで茲に祝辞を呈す。

明治四十年十月十三日 馬哇島ワイルク

ドクトル小林参三郎 敬白

またワイルク本願寺付属小学校における拝賀式并増築落成式が11月3日、挙行され、出席した小林については「我国体の清華と教育との関係に就て大に述る所あり」⁸⁷⁾と報じられている。このよ

うに小林はマウイ島のワイルクからホノルルや当地の仏教青年会に関わる事業について想いを寄せている。そして1908(明治41)年8月、当初の計画から日露戦争勃発のため予定より遅れて小林はハワイから帰国したのである。

『同胞』には「ドクトル小林参三郎氏及び夫人は休養のため六ヶ月予定にして去る〔8月〕七日アメリカ丸にて出発」⁸⁸⁾とあるが、ここには半年の休養のための一時帰国で、意識的にか真言宗の事業のためとはなっていない。

結びにかえて

一帰国、そして慈善病院の開設

1908(明治41)年8月、5年ぶりに帰国した小林及び祖風宣揚会は、いよいよ京都で真言宗慈善病院設立にむけて最終的な段階に入っていくことになる。同年10月14日、宣揚会会長土宜法龍や名誉会長鎌田親応、清滝智龍が参集し宗教的病院の設立を決し、理事の清滝智龍が経営主任となった。そして11月に京都府に使用願いを届けた。

翌、1909(明治42)年になって病院の建設は具体的に動きだし、1月5日事務所の地を定め建築に着手し、名称も「済世病院」と命名された。そして2月22日、上棟式が挙行された。こうして済世病院は建立に向けての船出を始め、6月14日に正式に京都府から開始の認可を得、病院がまだ完全に出来ていない状況で診察が開始されていく。この間、小林は彼の故郷、加東郡福田村南坊(神咒寺)に済世病院の支部を置き、ここを拠点に診察を開始している。しかしこれも一時的なもので4月30日に閉院式をなしているが、これは京都の病院に大凡開院の目途がついたことによるのであろう。そして小林は済世病院長としてのその職務を果たしていくことになるのである。かくして幾多の困難を経て、済世病院が正式に開院式を挙行したのは、帰国後、大凡1年後の1909(明治42)年9月19日のことである⁸⁹⁾。

この論文において、これまで謎とされてきた小林のハワイ時代を中心に論じてきた。彼は明治20年代から30年代にかけて、ハワイに参集する日系移民の人々の生活に対して、とりわけ医療をとおして貢献していったのである。異国で言葉も分か

らない多くの日本人に対してこうした行為は、具体的には日本人病院として経営の中にあった。それは毛利伊賀や灰田勝五郎らとの協力の中で行なわれていった。しかし彼の経営する病院は日本人慈善会に寄付され、日本人慈善病院の傘下に入っていた。しかし彼はこのハワイ時代において、今村恵猛から感化を受けて仏教への関心を広めていったことも重要な出来事であった。それが一時帰国後の真言宗祖風宣揚会へと繋がっていくものである。彼が生涯、畢生の仕事を慈善病院経営とし、ここに彼の夢をもっていった原点にはこのハワイでの多くの体験があったといって過言ではないであろう。まだ、史料も充分渉猟したわけではなく、事績の確認が得られていない所も多々あるがこれは今後の課題としてして、ハワイ時代の小林の概略を描くという所期の目的を達しと思われ、ひとまず擱筆することにする。

註

- 1) 中西直樹「小林参三郎と済世病院」『仏教と医療・福祉の近代史』（法蔵館、2004）。日本仏教社会福祉学会編『仏教社会福祉辞典』（法蔵館、2006）には、「済世病院」（111～112頁）の項目がある。
- 2) 例えば山中速人の『エスニシティと社会機関 ハワイ日系人医療の形成と展開』（有斐閣、1998）参照。また Eriko Yamamoto, *THE EVOLUTION OF AN ETHNIC HOSPITAL IN HAWAII: An analysis of ethnic processes of Japanese Americans in Honolulu through the development of the Kuakini Medical Center* (1988) はクアキニ病院 (Kuakini Medical Center) についての歴史について詳しく論究したものであり、その前身である日本人慈善病院や小林の日本人病院等、その関連についても触れられている労作である。
- 3) MICHAEL M. OKIHIRO, "Japanese Doctors in Hawaii" *The Hawaiian Journal of History* vol. 36 (2002)
- 4) 例えばマキキ教会牧師奥村多喜衛は小林が亡くなった時、「故小林参三郎氏を憶ふ」といった追悼の文章を書いており、その中で「氏と出会ふとき忽ち意気相投合し、十年の知己の如き交りを結んだ」「毎年元旦には氏は必ず総領事館に拝賀に出て、他に回礼などは一切為ないで直ちに余が家に来り。本年中の心得とすべき金言なり訓戒なり聞かせてもらいたいとて、永い時は半日も話し込んだものである」（ハワイ、マキキ聖城教会所蔵史料）といったエピソードを紹介している。
- 5) 小林参三郎の略歴については、例えば「小林参三郎小伝」『静坐物語』（三葉文庫、1959）所収、や高見羽峰「院長小林ドクトル」『六大新報』315号（1909年9月19日）、相賀溪芳『五十年間のハワイ回顧』（「五十年間のハワイ回顧」刊行会、1953）、兵庫県海外発展史編集委員会編『兵庫県海外発展史』（兵庫県、1970）等があるが、それぞれ年代や月日において差異が見られる。とりわけハワイ時代においては、各事績において年月日の相違がある。
- 6) 小林と松本順については、高見羽峰が「松本軍医総監と小林ドクトル」『六大新報』315号（1909年9月19日）という論文を執筆しており、2人の往復書簡は「数十百通」あり、この文中にもハワイ時代のものも一部紹介されている。高見は松本的小林について「予の志を知り予の業を紹ぐ者なり」という言葉を紹介している。その他小林と松本についてのエピソードが多く掲載されている。これについては別稿において論究したい。
- 7) クーパー医科大学 (Cooper Medical College) は現在、スタンフォード大学の医学部となっている。同大学医学部アーカイヴの調査の結果、彼は1891年に毛利伊賀と共に卒業している。ちなみに小林の同大学の卒業論文のタイトルは *Inaugural dissertation on apoplexy* というものである。
- 8) クーパー医科大学については、*A CHRONOLOGY OF STANFORD UNIVERSITY AND ITS FOUNDERS 1824-2000* (Stanford Historical society, 2001) や *Stanford University of Medicine, RECOLLECTION OF COOPER COLLEGE (1883-1905)* (Stanford Medical School, 1964) 参照。なお筆者が2006年1月、調査したところによれば、サンフランシスコの以前、クーパー医科大があった所は現在、州のメディカルセンターになっている。
- 9) 同志社大学人文科学研究所編『在米日本人社会の黎明期』（現代史料出版、1997）の「序」V頁。
- 10) 同上、245頁。
- 11) 阪田安雄他編『福音会沿革史料』（現代史料出版、1997）、121頁。
- 12) 同上、124頁。
- 13) 同上、125頁。
- 14) 鷲津尺魔『在米日本人史観』（羅府新報社、1930）には、「クウパア医科大学最古の卒業生」という項で「クウパア医科大学は、現スタンフォード医科大学の前身であるが、此大学を卒業せる最古の日本人は、毛利伊賀と、小林参三郎である。クウパア大学時代の卒業生の記録は尋ね難いが、著者の記憶によれば右兩名の外、明治三十年（一八九七年）までに卒業した人は、灰田勝五郎 児玉林平 曾我菊次郎の諸氏である」（53頁）と記されている。
- 15) 藤井秀五郎『新布哇』（文献社、1902）の「付録在

- 布哇日本人出身録』（4頁）より。
- 16) 小林参三郎『静坐物語』（三葉文庫、1959）、8頁。
 - 17) 一般的なハワイの歴史については、増補再版編集委員会編『ハワイ日本人移民史』（ハワイ日本人連合協会、1977）、相賀溪芳『五十年間のハワイ回顧』（「五十年間のハワイ回顧」刊行会、1953）、同志社大学人文科学研究編『北米日本人キリスト教運動史』（PMC出版、1991）等参照。
 - 18) 森田栄編『布哇日本人発展史』（眞榮館、1915）
 - 19) 相賀溪芳『五十年間のハワイ回顧』（「五十年間のハワイ回顧」刊行会、1953）、127頁。
 - 20) 外務省編『日本外交文書』（日本国際連合協会、1952）26巻、756頁。
 - 21) 高見羽峰「院長小林ドクトル」『六大新報』315号（1909年9月19日）によれば「翌年〔1903年〕春病に罹りて帰朝し平癒後直に渡哇せり」とある。
 - 22) 藤井秀五郎『新布哇』（文獻社、1902）によれば、この義捐金募集人は小林の他に中山譲治、岡部次郎、小林卯之助らであり、8860円余を赤十字に寄附をし、1894（明治27）年11月30日付で、赤十字総裁彰仁親王、赤十字社長佐野常民から「感謝の辞」が贈られている（532～533頁）。
 - 23) 木原隆吉『布哇日本人史』（文成社、1935）、494～495頁。
 - 24) 藤井秀五郎『新布哇』（文獻社、1902）、226～227頁。
 - 25) 『やまと新聞』101号（1896年11月10日）。ちなみに『やまと新聞』は日清戦争の時、ホノルルにおいて盛大な祝勝会を開催したが、その時、「やまと倶楽部」というものを作り、内田重吉や今西兼二、水野波門らが主唱者となって「新聞やまと」を発刊したのが始まりとされている（『新布哇』652頁）。
 - 26) 同上。
 - 27) 『やまと新聞』117号（1897年5月15日）
 - 28) 『やまと新聞』162号（1897年8月28日）
 - 29) 『やまと新聞』164号（1897年9月2日）
 - 30) 『やまと新聞』425号（1899年6月3日）
 - 31) 『ひかり』1巻1号（1899年7月5日）。また病院の様子については「地静に気清く三階の如きは東ダイヤモンドヘッドより西ワイアナエ岬に至り前は水天相連れる濱まで凡て一眸の中に収め病者保養には最も適なる地を占めたり」と説明している。ちなみに『ひかり』（LIGHT）の創刊号（1巻1号）には「光照り出づ」という巻頭言があり「疾風帆を裂き急雨蓬を破り澎湃たる怒濤船を渡する荒しの夜にも一條の灯光能く幾多舟子の力となり望となり又救となるを得べし醜聲湧き腥風卷くの魔窟も一点の光に照さるれば百鬼為に跡を収む今や在留同胞間の暗黒面を窺へば舟路嶮悪百鬼横行の観あり果して然らば我ひかり微弱なりと雖も使命重且大なりと謂ふべし」云々とある。『ひかり』
 - 32) 『やまと新聞』449号（1899年8月3日）
 - 33) 藤井秀五郎『新布哇』（文獻社、1902）、225頁。
 - 34) 『ひかり』1巻6号（1899年12月15日）には「新築落成に付汎く患者入院の依頼に应ずホノル、府リリハ町日本人病院米国医学士小林参三郎」という広告が掲載されている。
 - 35) 『ひかり』1巻10号（1900年4月5日）。これに並んで毛利は「小生ベレタニア街（エンマ街とフォート街の間）へ移転」することが掲載されている。
 - 36) 『ひかり』2巻18号（1900年12月15日）の広告。
 - 37) 『やまと新聞』635号（11月27日）
 - 38) ハワイ、マキキ聖城教会所蔵史料。ちなみに在布哇国日本人慈善会規則は1894（明治27）年12月にも改正されている。日本人慈善会については別稿において詳論したい。ただクワキニメディカルセンターの調査で、慈善会についての史料（『日本人慈善会報』等）が発見出来なかったのは残念であった。後日の調査課題にしたい。
 - 39) 奥村多喜衛の簡単な事績と社会事業活動については室田編『人物でよむ近代日本社会福祉のあゆみ』（ミネルヴァ書房、2006）所収の「第1部第8章奥村多喜衛」を参照されたい。なお奥村の全体的な人物像については、中川美佐『土佐からハワイへ』（「奥村多喜衛とハワイ日系移民展」実行委員会、2003）を参照されたい。奥村は生涯多くの著作を残している。とりわけ『太平洋の楽園』（三英堂書店、1917）は彼の自伝的なもので事績が多く語られている。社会福祉の歴史から言えば、「奥村ホーム」があり、これについては別稿で詳論する予定である。この奥村ホームの児童の検診において、小林は毛利とともにボランティアとして働いている（『ひかり』1-8参照）。
 - 40) 『やまと新聞』429号（1899年6月13日）
 - 41) 『やまと新聞』467号（1899年9月23日）
 - 42) このベスト事件については、すでに日本語の多くの文献によって紹介されている。また *Hawaii Histirical Review* 等の研究誌にもこれに関する論文がある。最近、これを取り扱った英文の著作文献として James C. More; *PLAGUE and FIRE: Battling Black Death and the 1900 Burning of Honolulu's Chinatown*— (Oxford University Press, 2005) があり、これにはこの大火の全容が描かれている。
 - 43) 『ひかり』1巻7号（1900年1月15日）。雑誌発行日以降の大火の記事があることから、大事件として急遽挿入したものと思われる。ここでは当初の被災者が1500人となっている。
 - 44) 藤井秀五郎『新布哇』（文獻社、1902）、678頁。
 - 45) 『やまと新聞』425号（1899年6月3日）
 - 46) 『ひかり』1巻8号（1900年2月15日）

- 47) 『ひかり』1巻10号(1900年4月15日)。この小林の日本人病院への入院を断った理由として、内田重吉は日本人病院は「幸ひに消却地帯外であるから、病者を収容するに何の不都合もなかつたが、此の病院はもともと小林君が個人で営利的に経営したものである。多数同胞が罹患しても無料で入院させる訳には行かぬ。もちろん小林君がいかに私財を擲つても之を救ふに限りがある。兎角の非難は世上に流布した。君としては何等かの手段方法を執らねば折角新築した病院の運命も想像がつかなくなった。同君は断然独逸行きを企てて一時日本人病院を閉鎖して帰朝した。かくして小林君の梟は附いても、始末のつかぬのは離隔所内同胞の普通患者である。当時の有志輩は頗る頭脳を痛めた。而して之を処理する方法は唯一病院の新築であつた」(日布時事編集局編『布哇同胞発展回顧誌』258頁)と回顧している。慈善病院建設の背景にもかかる経緯があつた。
- 48) 『やまと新聞』615号(1900年10月9日)
- 49) 『やまと新聞』598号(1900年8月22日)
- 50) 日布時事編集局編『布哇同胞発展回顧誌』(日布時事社、1921)、258頁。
- 51) 『やまと新聞』883号(1902年7月1日)
- 52) 筆者は『布哇新報』を見る機会を持たなかつた。この引用は『やまと新聞』885号(1902年7月3日)からの再引用である。1902年7月1日発行『布哇新報』の社説の一部であろう。
- 53) 『やまと新聞』884号(1902年7月2日)
- 54) 『やまと新聞』885号(1902年7月3日)
- 55) 『やまと新聞』910号(1892年8月2日)
- 56) ハワイに於ける仏教の歴史においては木原隆吉『布哇日本人史』(文成社、1935)等参照。
- 57) 今村恵猛については『真宗大辞典』巻一(1972)、25頁。今村恵猛『布哇開教誌要』(布哇開教教務所文書部、1918)、守屋友江『アメリカ仏教の誕生』(現代史料出版、2001)等参照。
- 58) 守屋友江『アメリカ仏教の誕生』(現代史料出版、2001)3頁。
- 59) 島田法子は『戦争と移民の社会史』(現代史料出版、2004)という著の中で「しかし実際には仏教はハワイの風土に適応し、ハワイの法則に則り、ハワイ仏教とも呼べるものに文化変容を遂げていった」(137頁)と述べている。
- 60) 守屋友江『アメリカ仏教の誕生』(現代史料出版、2001)、120頁。
- 61) 『やまと新聞』674号(1901年3月9日)
- 62) 小林参三郎『生命の神秘』(春秋社、1922)の「巻首に」といわば「序」に当たる部分においてこのことが書かれている。それにつき「出版者が序を書くこと云ふ事は、恐らく東西共に類例の多くない事であらう」と記されている。
- 63) 小林参三郎『静坐物語』(三葉文庫、1959)、12頁。
- 64) この事件については藤井秀五郎『新布哇』(文献社、1902)等参照。最近の研究として山本英政『ハワイの日本人移民—人種差別事件が語る、もうひとつの移民像—』(明石書店、2005)が詳しい。
- 65) 兵庫県海外発展史編集委員会編『兵庫県海外発展史』(兵庫県、1970)、378頁。
- 66) 藤井秀五郎『新布哇』(文献社、1902)492頁。
- 67) 『同胞』13号(1901年9月25日)
- 68) 『同胞』5巻3号(1904年3月25日)
- 69) 『同胞』3巻7号(1902年7月25日)。また同誌(3巻9号)収載の「米領布哇開教の現在教勢一覧表」における当時の青年会について「明治卅三年七月の創設に係る現今三百八十名の会員を有し、英語学校、機関雑誌「同胞」の発行、月次演説会、出張演説等皆此の会より成立す、在留青年会の宗教、風紀、道徳上の警醒を以て自任するものにしてホノル、市中第一流の団体なり」とある。
- 70) 中国行きに関して、高見羽峰は「其の〔明治35年〕十一月支那広東に之きて開業す、身に少恙あり、来診患者亦少し、更に香港に到りて業を開く、当時英領政府に出頭して開業免状を受けたり、蓋し日本医士にして免状を受けたる始めなり、されど来診患者の少きこと広東に異ならず、既にして病に罹り腸チブスより施いて肺炎を誘発す。病床に呻吟すること約二ヶ月間、就中一週間は水のみにて日を送れり、而も既に永劫無限の生命を確信せるドクトルは元氣内に充ちて必ず死せざるを自覚しつゝありき。嗚呼信仰の力も亦偉なる哉」『六大新報』315号(1909年9月19日)と当時の状況を述べている。翌年5月、加東郡に帰郷することになる。
- 71) 『同胞』4巻12号(1903年12月1日)
- 72) 祖風宣揚会については、拙稿「近代における真言宗の社会事業」(『高野山大学論叢』30巻)を参照されたい。
- 73) 『六大新報』315号(1909年9月19日)
- 74) 同上。
- 75) 同上。
- 76) 『六大新報』15号(1903年11月15日)
- 77) 『やまと新聞』1286号(1903年11月21日)
- 78) 『同胞』5巻9号(1904年9月1日)
- 79) 『六大新報』65号(1904年10月30日)
- 80) 例えば『やまと新聞』1355号(1904年2月20日)掲載の「軍事費取扱手続」参照。常設委員長は塩田奥造で、委員として33名が挙がり、その中に小林の名があり、献金期日は4月15日迄で1弗以上になっている。
- 81) 『やまと新聞』1700号(1905年4月20日)
- 82) この総会と評議委員会の様子については、『やまと

- 新聞』1683号(1905年3月30日)。しかし同号に翌日小林が辞職を申し出たことが報じられている。ちなみにこの総会で慈善病院とホノルル日本人医会との関係を絶つことが議論され、病院組織改正調査委員として奥村多喜衛が入っている。
- 83) 『やまと新聞』1686号(1905年4月4日)。ちなみに『同胞』5月号には「ドクトル小林参三郎氏は今回当市慈善病院院長に選定され候」と報じられているが、ここには小林の辞任のことが日本には伝わっていない。
- 84) 『同胞』7巻10号(1906年10月1日)、同日、それより前の午前6時から入仏式が挙行されている。夜は青年会の余興が盛会の内に営まれた。
- 85) この件については『同胞』8巻5号(1907年5月1日)に「青年会長更迭」として、4月26日に臨時総会が開催され、代わりに灰田勝五郎が選出されたことが報じられている。
- 86) 『同胞』8巻11号(1907年11月1日)
- 87) 『同胞』8巻12号(1907年12月1日)
- 88) 『同胞』9巻9号(1908年9月1日)
- 89) 開院後の濟世病院については、拙稿「近代における真言宗の社会事業」(『高野山大学論叢』24号)や「宗教と医療—小林参三郎と濟世病院での実践」(『密教文化』190号)を参看されたい。

※この論文を執筆するにあたって、ハワイ大学の Gay Michiko Satsuma 教授、同大学ハミルトン図書館の Tokiko Yamamoto Bazzell ライブラリアン、Joan Hori ライブラリアン、ハワイマキキ聖城教会の黒田朔牧師、Kuakini Health System の vice president 三木信幸博士には調査や研究において大変御世話になりました。またスタンフォード大学医学部とマキキ聖城教会アーカイブの皆様、史料調査において協力いただいたホノルル在留の山下由起夫氏に感謝いたします。

A Study of KOBAYASHI Sanzaburo in HAWAII: Focusing on his activity in Honolulu, 1892–1908

ABSTRACT

This paper presents research on KOBAYASHI Sanzaburo who was a medical doctor in Hawaii. There have been few studies of his life and work. KOBAYASHI was born in Hyogo prefecture and studied under MATSUMOTO Jun who was an army medical doctor. Then he entered Cooper Medical College in San Francisco to major in surgery. After he graduated from Cooper Medical College in 1891, he went to work as a doctor in Hawaii.

Hawaii has had many immigrants from Japan beginning in 1868. They confronted many difficult problems to live there. Dr. KOBAYASHI founded the Japanese Hospital in Honolulu in 1896. His reputation increased among not only Japanese but also among other foreigners in Hawaii. But this hospital was insufficient to meet the needs of Japanese in Honolulu. So he founded a new hospital in 1899. KOBAYASHI hospital was often called Nihonjin Byoin, or the Japanese Hospital.

He came to faith in Buddhism when he contracted a serious disease and became a member of Bukkyo Seinenkai (Young Men's Buddhist Association). Later there was the great Chinatown Fire in January 1900. This disaster left 3500 Japanese homeless. So Nihonjin Jizenkai (Japanese benevolent society) built the Japanese Charity Hospital. KOBAYASHI's Japanese hospital faced financial difficulties after the Chinatown fire. Then immigration companies bought KOBAYASHI's Hospital, and donated it to the Japanese Charity Society in 1902.

When he returned to Japan in 1903, he was requested to be a director of a charity hospital in Japan, so he went back to Hawaii in order to gather donations. In Hawaii he worked to raise funds and helped to found a charity hospital in Kyoto in 1908.

Key Words: KOBAYASHI Sanzaburo, Hawaii, history of immigration, charity, charity hospital